夕焼けのワンピース

瑠璃色の堕天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夕焼けのワンピース

【Ｎコード】
Ｎ４３７５Ｊ

【作者名】
瑠璃色の堕天使

【あらすじ】
第七弾。
いつも思うんですが、この二人いちゃつきすぎでしょ。
今回は抑え気味。

俺がこの町に来て、初めての秋の季節。
青々としていた木々も色が淡く染まり、日差しも和らぐ紅葉の時期。
その日も実に過ごしやすい気温となった。
今日は休日。
紅葉狩りに出かけたり、栗拾いとか出かけてもきっとのんびりできるだろう。
「おーい、相沢〜、そっちのペンキとってくれ！」
・・・これさえなければ。
「相沢！おい！！　聞こえているのか、ペ・ン・キ！」
「ああ、はいはい、分かってるよ。ほれ！」
俺は作業の手を止めて、近くに置いてある赤のペンキを北川に渡す。

「ふう、これで大体の目処はたったかな。あとそっちの模造、ちゃんと完成できそうか？」

「俺を誰だと思ってやがる。もう見えても皿洗いは天下一品だぞ」

「全然ポテンシャル、関係ないだろうが！　劇の俳優は猛練習しているんだぞ。ここで俺達がヘマをしたら、後々の怨恨になるぞ」

「分かってるよ。にしてもどうして大道具係は俺達なんだ？　絶対にメンバー、足りないだろ。もう何時だと思ってるんだ」

学校の中央にかかっている時計を見ると、もう時刻は午後六時にさしかかろうとしている。

朝からこの作業をやっているから、すでに八時間以上作業している事になる。

・・・いい加減疲れてきた・・・

「仕方ないだろ。水瀬と美坂は劇のメンバーに選ばれている。他のメンツも役作りや舞台演出、小道具、背景、音楽とかにかりだされてるんだ。残った俺らが看板作りやるしかないだろう」

北川の言う事はもっともだが、このペースだと間に合わない気がする。

腹も減ってきたしな――

「もう明日は文化祭だもんな・・・皆、張り切るのも無理はないけどな」

この学校で、俺にとってははじめての文化祭。

それがいよいよ明日に迫ろうとしていた。

うちの高校は何でもクラスごとでそれぞれの出し物をやるらしい。

今までの出し物を例にあげると、たこ焼、いか焼き、お好み焼きなどの屋台。

美少女、美男、女装（この企画がよく分からない）――コンテスト。

縁日、輪投げ、迷路（手作り）、お化け屋敷などのタイプ。

音楽、劇、武道等の部活、演出による物。

それらが主に、今までやってきた事らしい。

まあその辺は、恐らくどこの高校でも似たようなものだろう。

それでうちのクラスは「劇」をやろうという事になったのだが・・・

「いくらなんでも「ロミオとジュリエット」は無理がないか？

舞台演出、死ぬほど大変じゃないか」

「ロミオとジュリエット」がどのような物語か、あまりにも有名なので語る必要はないだろう。

あの物語が、今回うちがやろうとしている劇の内容である。

「だってうちの文化委員の斎藤がめちゃめちゃ乗り気だからな。あいつの情熱パワーに勝てる奴はいないないだろ」

「まあな。反対意見、理論論破して却下したし」

今ごろ劇の俳優達を叱り飛ばしているであろう、我がクラスメートを思い出して俺はため息を吐いた。

「でもお陰で、休日出勤までする羽目になったんだぞ。しかもまだ終わらないし・・・絶対にまずいって」

「文句ばかり言うなよ、相沢。早く手を進めて終わらせようぜ。教室で頑張っているメンバーや、体育館で練習している水瀬達も頑張ってるんだぞ」

「分かってる――けど、お前妙に今回張り切っているよな。いつもならお前、こういうのめんどくさがらなかったか？」

今回初日から妙に作業等に張り切っている北川に、俺は疑問を抱

いた。

今日も今日とて学校開門の時間に俺を呼んで、

こうして中庭を陣取って、あちこち作業の指示をだしているのだ。

「ふ・・・俺はいつだって熱い男だぞ」

「はいはい、寝言はいいから」

「寝言ってお前!？　まあいいか。

俺は元々こういうのは好きなんだよ。

皆で頑張って一つの事に熱中するのって楽しいじゃないか」

ジャージ姿でそういって笑う北川は、なかなかかっこよかった。

勿論そんな事は口には出してやらないが。

「ま、確かにな・・・じゃあとっととやるか」

改めて俺の担当である劇に使う模造を作ろうとした時、

「祐一さ～ん、ここで作業してたんですか」

「え、栞!？　学校に来てたのか、お前」

てくてくこちらに歩いてくる栞を見て、俺は目をパチパチさせた。
北川も手を止めて、驚いた顔をしている。
「はい、といっても作業じゃないんですけどね。
祐一さんの家にお電話したら、今日ここで作業をしていると聞いて、
お手伝いにきました」
にこにこ笑顔で手伝いを申し出てくれる栞が、俺は天使に見えた。
「わざわざ悪いな。栞の所はもう準備は終わったのか？」
「はい、うちは『休憩所』をやるんですよ。
ですから、実はほとんど準備はいらなかったりするんです」
恥ずかしいですね、とばかりに、栞は照れくさく笑った。
「休憩所か・・・そういうのだと楽でいいよな・・・」
しみじみと今までの作業を思い出してか、北川は苦笑する。

「ベンチとか飲み物支給、後音楽を流すだけですから。あ、私は音楽当番なんですよ」

「へえ、栞の選曲って気になる所だな」

「ふふ、祐一さん、どういう曲か知りたいですか？」

「いや全然」

「聞いて下さいよ、祐一さん〜」

「分かった分かった、それでどういう曲を選曲したんだ？」

「実はですね――」

栞はスラスラと曲名をあげる。

どれもバラードやラブソングの有名どころだ。

「へえ、なかなかの名曲ばかりじゃないか。センスあるな、栞」

「え、そうですか！？　そういっていただけると嬉しいです」

「胸はないけど」

「そういう事を言う人、嫌いです！！」

「まあまあ人間。得て不得手はある」

「関係ありません！」

「大丈夫、いつかはきっと——きっと何とかなるさ」

「遠い目をして言わないでください！！」

栞は頬を膨らませて怒っている。

ちょっとからかいすぎたかな・・・

「せっかくさしいれを持ってきましたが、祐一さんにはあげません。北川さん、よかったらこれ、食べて下さい」

そういって、栞は持っている袋からアイスを取り出した。

「おお、俺にわざわざ！？　ありがとう、栞ちゃん」

心底嬉しそうに笑う北川の顔を、殴りたく思う俺が愛しかった。

ちなみに出したアイスは、バニラばかりだったのは予想通りである。

「いいえ、いっぱい食べて下さいね♪　祐一さんはいらないそうですから」

待った待った！！　俺は一言もそんな事はいってないぞ！？

「じゃあいただきま〜〜〜す！　うん・・・
これ、甘くて美味しいね、琹ちゃん。疲れた体にエネルギーが宿るよ」

さも美味そうにゆっくりゆっくり食べる北川。

くそ・・・こいつ、絶対嫌味で俺に見せびらかせてやがる・・・

「琹〜、俺が悪かったから」

「知りません、頑張って祐一さんは作業して下さい」

「そうそう、お前は頑張って完成させろよ」

アイスをパクパク食べながらいっても、説得力はゼロだぞ！

仕方がない、最終奥義を出そう。

「あ、明日文化祭一緒に回る時好きなもの、奢ってやるからさ」

「本当ですか、祐一さん！？　嘘じゃないですよね？」

「も、勿論だ・・・」

我ながら声がちょっと震えていたのは、根性がない所だと思う。

「じゃあこれ、祐一さんの分です。食べて下さい♪」

機嫌を直して、栞は袋からアイスを俺に差し出してくれた。

うう、高い買い物になった・・・

「栞、ここに座るか。地面に直に座ったら汚れるぞ」

俺はその辺の材料をかたづけて、椅子代わりの木材を置く。

「すいません、ありがとうございます」

そうして俺達は、しばらく腰を置いて三人アイスを食べていたが・・・

「祐一さん、準備、完成しそうですか？」

「そうだな、俺と北川、それと助っ人がもうすぐ来るから、
それで頑張って後二時間って所か」

「設置の時間とかもあるから、多分もうちょっとかかるぞ相沢」

「くわー、これは夜遅くなるな・・・」

夕ご飯を食べるのはどうやらかなり先になりそうだ。

「そうですか・・・私もお手伝いしますよ」

「いや、でも時間帯を考えると栞に手伝わせる訳にはいかないだろ。
この作業、夜遅くなるぞ」

「そうだな、さすがにそこまでしてもらっては栞ちゃんに悪いよ。
あまり遅くなったら、両親も心配するしね」

俺達が口々にそう言うと、栞は

「大丈夫ですよ、お姉ちゃんも劇に参加しているんでしょう?
一緒に帰れば問題なしです！　それに——」

「それに？」

「こうやって、皆で苦労をするのも思い出の一つになりますから」

あ・・・

差し込んでくる夕日に照らされての栞の表情感じがして、見ている俺がドキドキした。

「？　どうかしましたか、祐一さん？」

「あ、いや・・・そうだな、じゃあ栞に手伝ってもらおうかな」

「おいおい、相沢！？　・・・ま、いいか。
じゃあすまないけど、相沢の方をサポートしてあげてくれる？」

こうした労働でも楽しい事を知っている北川は、栞の言いたい事が分かったのだろう。

北川がそういうと、栞は腕まくりをして、

「はい！　祐一さん、頑張って手伝いますからなんでも言って下さいね！」

栞も気合を入れて頑張ってくれているし、俺も頑張るか！

「じゃあよろしく頼むぞ、相棒」

「任せて下さい！」

こうして俺達は夜遅くまで作業を続けた。

次の日、無事に完成した看板は校門に設置された。

その時にこっそり俺、北川、栞のサインを付け加えたのは秘密である。

それもまた一つの大切な欠片——

＜終＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4375j/

夕焼けのワンピース

2010年10月11日04時49分発行